

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320008

研究課題名（和文） 中国イスラム哲学形成の研究

研究課題名（英文） Research of the formation of the Chinese Islam philosophy

研究代表者

堀池 信夫（HORIIKE NOBUO）

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：10091927

研究成果の概要（和文）：中国ムスリムは、唐代に先達が入華して以来、元代まで各地に広がり、その間、イスラム思想は中国の伝統思想との対立や融合をへて、明代にいたって中国イスラム哲学とも称すべき独自の哲学が起こってくる。本研究はその中国イスラム哲学の形成期について、諸哲学者の著述をめぐってその具体的施策の内容面にまで踏み込んで研究を進めたものである。

研究成果の概要（英文）：After the predecessors of Islam believers (Muslim) entered China, Muslim had extended gradually in various parts of China. In historical development of such Chinese Muslim, the intellectual information of Islam were brought, and passed the confrontation and uniting with the Chinese traditional thought, and there appeared a peculiar Chinese Islam philosophy. In the present study, the research was advanced on the first stage, or on the formation period of the Chinese Islam philosophy, depressing to a concrete contents of the thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	6,300,000	1,890,000	8,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：中国イスラム哲学、王岱輿、朱子学、ムハンマドの神性、東西思想交渉、理性、馬注、劉智

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始の当時、我が国の中国哲学研究の学界においては、中国にイスラム哲学というものが存在しているということすらも、ほとんど知られていなかった。それゆえその中

国イスラム哲学の思想的内実・実体がどのようなものであるのかということももちろん知られていなかった。

(2) それについての研究も、本研究の代表者

がとりかかった以外には、「中国イスラム思想研究会」に所属する数人の研究者と、あと一、二の研究者がいるのみであり、極めてほそぼそとした状況であった。

2. 研究の目的

専門的学界においても中国イスラム哲学はほとんど知られていないという状況に鑑み、本研究ではまず中国イスラム哲学の形成期の歴史的展開・実情を描き出すこと、および中国イスラム哲学というものの思索の内実がどのようなものであるのか、すなわち中国において展開した哲学であるから中国思想にはちがいないが、イスラム哲学の思索をも継承しているという、その独特の性格を描き出すこと、以上の2点を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 中国イスラム哲学者の登場する以前の中国におけるイスラムの思惟の展開、および中国イスラム哲学者登場以後の彼らの哲学的思索という、二つの段階に分けて研究を進めるという方法をとることとし、それぞれの段階における展開を、歴史的な側面と個別の思想家ないし文献を抑えることによって描き出すことにした。

(2) 歴史的展開の研究の場合、いわゆる「史料」は通常中国人思想家の場合と異なり、まず正史にはほとんど記載されていないこと、またイスラム関係の人物の活動はどちらかというと辺境地域でおこなわれたため、まとまった伝記集のようなものがほとんどなく、さまざまな文献のここかしこに偏在しているため、そのための調査ということが必要となる。

(3) また、それぞれの哲学者たちの著作もこの研究開始の段階ではあちらこちらに偏在していたので困難が予想されたが、タイミングよく中国の黄山書社から『清真大典』という中国イスラム著作の叢書が刊行されたため、中国イスラム哲学に関する資料を入手するのに非常に有効であった。

(4) 本研究は中国イスラム哲学の研究であるから、歴史的研究をへつつも最終的には哲学的内実を描き出すことが目的である。そのために、哲学研究の鉄則である文献資料は必ず原典著述に基づいて、それを解読し分析するという地味な手法をとることとした。これは目的とする研究領域が未開拓であるということから、まずは基礎的かつ着実な方法をとろうとしたためである。

4. 研究成果

(1) 以下の「5. 主な発表論文等」に示した

とおり、研究代表者と研究分担者によって、中国イスラム哲学者登場の時代の諸側面にわたって実際の研究は進められたが、研究課題にもっとも沿った成果を以下に示す。

(2) 方法として二つの段階に分けた第一段階である中国イスラム哲学者登場以前のイスラムの思惟について、宋末の蒲壽宥、明代の丁鶴年、同じく明代の薩都刺、明代の李卓吾、そして著者不明の『省迷真原』について研究した。

(3) 蒲壽宥については、まったく先行研究がなく、今回初めてその思想の分析がおこなわれた。蒲壽宥は、宋末、科挙に志し地方の官吏になった。彼の著作は伝統中国の文人のスタイルで著されているが、そこに用いられている概念のいくつかにはイスラム的な内容があり、それは同時代のトルコの哲学者ルーミーの哲学に相呼応するところがあることを論証した。

(4) 丁鶴年は詩人としての研究が先行研究に一つだけあったが、そのイスラム的かつ中国的（儒教的）な思想分析はやはり今回初めておこなわれた。彼はムスリムであったためもあり、中国伝統社会における成功はなかった。しかし彼はムスリムでありつつも儒教を熱狂的に支持し、その儒教礼賛・儒教的リゴリズムは、中国の士大夫・儒者たちすらもがたじろいでしまうほどに強烈なものがあった。ムスリムでありつつ儒者であること、すなわち「ムスリム儒者」の一つの嚆矢であったといえる。

(5) 薩都刺は漢詩人として著名な人物であるが、やはりその思想的な研究は初めてである。彼の漢詩における天や銀河をえがく壮大なイメージには中国人離れしたものがあるが、一方、月や星の表現における繊細な表現には蒲壽宥と同様のイスラム的色彩が見られることを論じた。

(6) 李卓吾は明代思想史のスーパースターであるが、彼がムスリムであるという前提のもとでの思想的な研究はほとんどなかった。今回は、彼がムスリムの家系に生まれた人物であることと彼が陽明学（もちろん儒教である）の徒であることが矛盾的な事態ではないこと、そして彼の『老子解』における「聖人」概念の二重的意味について、イスラム神秘主義哲学の「ムハンマドの神性」の概念をそこに導入するとその二重性が無理なく理解できることを分析した。

(7) 以上の研究について、現在刊行されているのは蒲壽宥に関するものと、李卓吾がムス

リムでありかつ陽明学者であることは矛盾しないことを論じた2本の論文だけであるが、李卓吾の『老子解』についての論文は23年度注に刊行される予定である。

(8)『省迷真原』は作者不明の著述であるが、中国イスラム哲学者登場前夜の中国イスラムの思惟が、極めて中国的色彩に染められたものであったことを本研究において初めて明らかにした。とりわけ『省迷真原』には、道教的な内容が含まれており、「中国イスラム哲学」という思想が定立してくる前段階の(ムスリム儒者のような高度の知識人ではない)一般的な中国ムスリムの知的状況は、ある意味でまだ混乱しているところがあることを分析した。こういった混乱が回復されるのは、中国イスラム哲学者が登場し、イスラムの論理と中国の論理とを対決・融合させることが、知的・意識的におこなわれるようになってからである。『省迷真原』の思想については論文2本が公刊された。

(9)研究方法の第二段階である中国イスラム哲学者登場以後のことであるが、これについては最初の中国イスラム哲学者というべき王岱輿とそれに続く馬注の哲学を研究した。

(10)王岱輿については、『正教真詮』『清真大学』の二著を中心に分析を進め、とくにその「真一」の概念が、アッラーでありまた「ムハンマドの神性」概念を承けるものであることを中心に分析した。またそれらが漢文で表現されるとき、朱子学的「太極」「無極」の概念が用いられ、その「太極」「無極」概念の展開過程は『大学』の論理を下敷きしていることを明らかにした。王岱輿の哲学に関しては、論文2本が公刊された。

(11)馬注については主著『清真指南』を中心に分析をおこなった。馬注の思想は王岱輿の哲学を前提にそれを継承するものである。馬注の特質はイスラム教を中国における公許信仰としたいと熱望する点にあった。彼は康熙帝に積極的に接触を求めたが、結局成功せずに終わり、晩年は雲南においてイスラムの異端信仰と戦った。馬注についての研究は23年度中に印刷される予定になっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13件)

①堀池信夫「『老子』の「道」と李卓吾——『中国のイスラム思想と文化』に寄せて——」(『勉誠通信』第16号) 査読無、pp. 2-3, 2010.

②堀池信夫「蒲寿成小攷——中国イスラム哲学成立以前のムスリム知識人——」

(『多元的世界観の共存とその条件』国際高等研究所)、査読無、pp. 47-58, 2010.

③堀池信夫「『詩譜』的宇宙構建」(『中国儒学』第5輯(社会科学出版社))、査読無、pp. 378-404, 2010.

④堀池信夫「『清真大学』の三一構造」(『中国イスラム思想研究』第3号)、査読無、pp. 10-82, 2010.

⑤井川義次「理性の共振—ヴォルフと宋明理学の親和性—」(『多元的世界観の共存とその条件』国際高等研究所)、査読無、pp. 27-46, 2010.

⑥堀池信夫「中国のイスラム思想と文化」序説—中国イスラム哲学研究の現在」

(『中国のイスラム思想と文化—アジア遊学129—』勉誠出版) 査読無、pp. 4-18, 2009.

⑦堀池信夫「『省迷真原』再探—沐浴と礼拝—」(『宋学西漸II』(平成21年度科学研究費報告書))、査読無、pp. 5-13, 2009.

⑧井川義次「朱子語類訳注—卷三十論語十二雍也篇—」(『宋学西漸II』(平成21年度科学研究費報告書))、査読無、pp. 41-59, 2009.

⑨堀池信夫「無極と太極」(『宋学西漸』(平成20年度科学研究費報告書))、査読無、pp. 47-86, 2008.

⑩堀池信夫「無と道—韓康伯の思想—」(『狩野直禎先生傘寿記念三国志論集』汲古書院)、査読無、pp. 21-48, 2008.

⑪堀池信夫「『省迷真原』初探—最初期の中国イスラム哲学と道教的思惟—」(『東方宗教』111号)、査読無、pp. 72-81, 2008.

⑫井川義次「宋明理学の人間・自然観と近代西洋哲学への影響」(『自然科学を含む人文・社会科学を基盤としたサステナビリティ・スタディーズ構築のための国際学融合的研究』筑波大学)、査読無、pp. 9-46, 2008.

⑬井川義次「明徳と理性」(『宋学西漸』(平成20年度科学研究費報告書))、査読無、pp. 9-46, 2008.

[図書] (計 1件)

①井川義次『宋学の西遷—近代啓蒙への道—』人文書院、pp. 1-536. 2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀池 信夫 (HORIIKE NOBUO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授
研究者番号：10091927

(2) 研究分担者

井川 義次 (IGAWA YOSITSUGU)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・
教授
研究者番号：50315454

(3) 連携研究者

菅本 大二 (SUGAMOTO HIROTSUGU)
梅花女子大学・文化表現学部・教授
研究者番号：30299002

辛 賢 (SIN HYEON)
大阪大学・大学院文学研究科・講師
研究者番号：70379220

松崎 哲之 (MATSUZAKI TETSUYUKI)
常磐大学・コミュニティ振興学部・准教授
研究者番号：40364484